

琉球大学学術リポジトリ

Ryudai News Letter `17(Vol.21)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2024-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020343

News Letter

特集

I

学長対談

沖縄を牽引する大学へ

特集

II

琉大研究ズームアップ

ローカルだけどグローバル

April
2017
vol. **21**

琉球大学広報誌

琉球大学附属図書館



0020228018963



377.3

SO

21

雑誌



国立大学法人琉球大学

University of the Ryukyus

輝く 琉大生



法文学部国際言語文化学科4年
屋比久 知奈 (やびくともな) さん
ディズニー映画「モアナと伝説の海」
日本語版主役の声優に抜擢され、一躍
時の人となった。卒業後は「観客の心
に何かを届けられる表現者になりたい」
とプロの道へ進む決意を語った。



目次

01 輝く琉大生

法文学部国際言語文化学科4年
屋比久 知奈

03 特集Ⅰ 学長対談

沖縄を牽引する大学へ

株式会社琉球銀行取締役頭取
金城 棟啓

琉球大学学長
× 大城 肇

07 特集Ⅱ 琉大研究ズームアップ

ローカルだけどグローバル

工学部電気電子工学科 教授
千住 智信

09 UR Topics

15 Information

表紙【千原池と球陽橋】

千原キャンパスを南北に分断しているのが千原池。この池の周りには、日本一大きなドングリが実るオキナワウラジロガシのほか、南部では珍しいイジュやヤマモモなどの木々が生育するやんばる[®]のような森が広がっています。池に架かる球陽橋からは、梢にとまる大きなアオサギや池に浮かぶコガモなどの水鳥たちも見られ、都市化が進む琉球大学周辺にあって、千原池は生き物たちにとって貴重なオアシスとなっています。

沖縄を牽引 する大学へ

琉球大学への期待

II 琉球大学のミッション

大城 今年度から6年間、国立大学86大学は、それぞれの機能強化に応じた取組みによって、運営費交付金について「重点支援①、②、③」という3つの支援の枠組みが設けられましたので、琉球大学は重点支援①に手を挙げました。重点支援①は「主として、地域に貢献する取組みとともに、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で世界・全国的な教育研究を推進する取組みを中核とする国立大学」ということで、いわゆる地域貢献型大学です。86大学のうち55大学が、ここに入っています。九州では、九大、福岡教育大、九州工業大、鹿屋体育大以外はこちらに分類されています。重点支援②は「主として、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で、地域と言うより世界・全国的な教育研究を推進する取組みを中核とする国立大学」。九州ですと、福岡教育大や九州工業大、それから鹿屋体育大などの15大学がこちらに入っています。重点支援③は、「主として、卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組みを中核とする国立大学」、いわゆる旧帝大を中心とした研究大学です。東京大学、京都大学、九州大学、広島大学、一橋大学、筑波大学など16大学です。琉球大学は地域貢献型ですから、沖縄の特色を出しながら、地域にどう貢献していくかということが大きな

ミッションになっています。

実は、地域貢献は、琉球大学にとっては創立時からのミッションでした。創立時にミシガン州立大学の指導で、研究普及部をつくっています。当時、日本の大学には無かった仕組みで、研究成果を地域に還元するために、今でいうサテライトである那覇エクステンションセンターとか、奄美の大島分校などが設置されました。そこで農業技術を指導したり、あるいは栄養学を指導したりしていたんです。それから、英語教育であるとか教員の講習とか、そういったことをやっていました。もともと、地域貢献活動を日本復帰前の1968年頃までやっていたんです。Land Grant Universityの伝統が根づいていました。

金城 そうでしたか。以前、学長にお話したんですが、琉球銀行はBank of the Ryukyus。琉球大学は

University of the Ryukyus。どちらも“the Ryukyus”と複数になっています。これは、「琉球列島」の銀行であり、大学であるという意味なんですね。地域に貢献する、地域のためにある大学であり、銀行であるというところで、琉大と琉銀の生い立ちが似通っています。

大城 琉大は、戦後、沖縄の復興は教育から、という県民やハワイの沖

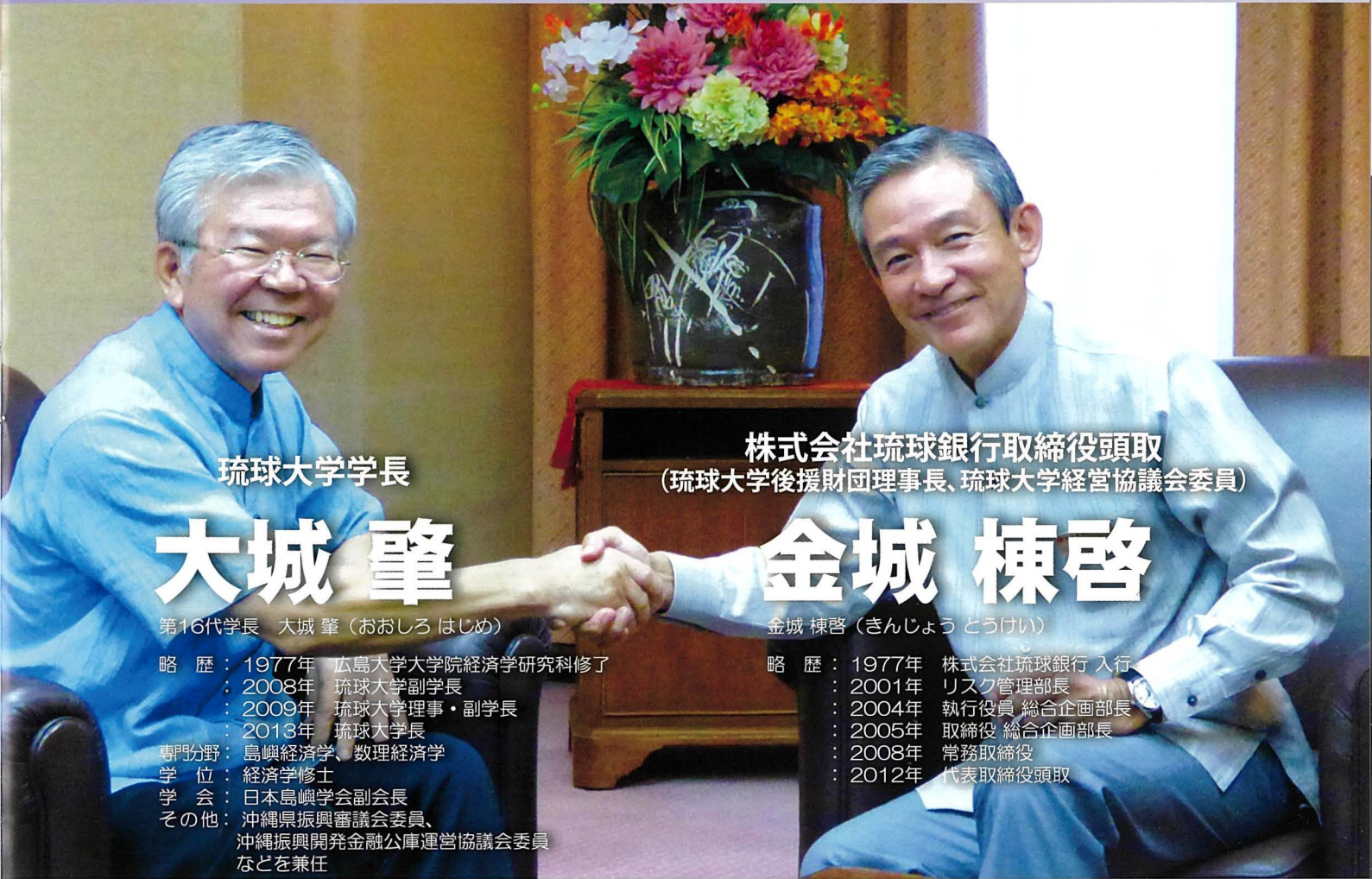
縄県人会の熱い要望をうけて設立されました。1950年5月22日が創立記念日ですが、最初の学生便覧に「本大学は日本のものでもなく、アメリカのものでもない。これは琉球諸島の人々の役に立つ学府」であるという趣旨の文章があるんです。頭取がおっしゃるように、琉球アイランズ（islands）のための大学という使命をもっていました。

II 沖縄の将来と人材育成

金城 これまで沖縄は島嶼県であるがゆえのマイナス面が大きかったです。輸送コストがかかる。電気料金は高い。台風は来るし、水はない。こんな所で産業なんか育つはずがないといわれていましたが、ここ

経済発展のポイントは
やはり教育、
人材育成にあります。（金城）

2、3年ぐらいから随分変わってきましたよね。今の沖縄は、全国的に見ても景気がいい。日銀短観で、プラスの46、それから39と非常に高い数字なんですね。他府県と比べて人口も増えていますし、実に特異な地域になってきています。海外からの観光客も増加しており、沖縄を日本の西南端ではなくアジアの中心という見方が増えていることを実感しています。



琉球大学学長

大城 肇

第16代学長 大城 肇（おおしろ はじめ）

略 歴：1977年 広島大学大学院経済学研究科修了
 ：2008年 琉球大学副学長
 ：2009年 琉球大学理事・副学長
 ：2013年 琉球大学学長
 専門分野：島嶼経済学、数理経済学
 学 位：経済学修士
 学 会：日本島嶼学会副会長
 その他：沖縄県振興審議会委員、
 沖縄振興開発金融公庫運営協議会委員
 などを兼任

株式会社琉球銀行取締役頭取

（琉球大学後援財団理事長、琉球大学経営協議会委員）

金城 棟啓

金城 棟啓（きんじょう とうけい）

略 歴：1977年 株式会社琉球銀行 入行
 ：2001年 リスク管理部長
 ：2004年 執行役員 総合企画部長
 ：2005年 取締役 総合企画部長
 ：2008年 常務取締役
 ：2012年 代表取締役頭取

大城 そういう意味で今はいいチャンスかもしれませんね。現在、沖縄振興計画は5年の折り返し点に来っていますが、環境条件も変わってきておりますし、次のステップとして、従来型ではないものを目指してもいいのではないかと考えています。

金城 経済発展のポイントはやはり教育、人材育成にあると思いますね。私も、3年半前に、琉球大学の大学院を出た中国人を1人入社させたんですが、彼女は次のステップを目指してアメリカの大学で勉強するために、この8月末に当行を辞めてサンフランシスコに行きました。3年半、コンサルティング営業部と証券国際部で働いてもらいましたが、とてもいい子ですね。最後はあいさつに来てくれましたけど、ぼろぼろ泣いていましたね。大変いい経験になった、またぜひ沖縄に来たいと言っていました。

私は、若い頃は海外に行ったことがなかったんです。この年になって、海外に行くようになって思うことは、若いときにいろんな国を経験して、世界

の広さ、逆にまた狭さであるとか、さまざまな考え方のある世界、ダイバーシティを体験すべきだということです。そして、沖縄に帰ってきて、そういう経験を生かして沖縄のために何か貢献してほしい。ずっと沖縄にいたら、どうしても発想も含めて発展性がないという気がするんです。

大城 今、グローバル化に対応したグローバル人材の育成をどの大学も目指していますが、琉球大学でも2016年5月に台湾事務所を開設しました。沖縄県産業振興公社の事務所に入れていただいて、職員もまだ置いていないんですが、さっそく交流協定を結びたいというお話があり、国立台南大学と台湾の西にある澎湖諸島の国立澎湖科技大学と協定を結ぶことになりました。

澎湖科技大学は観光と海洋生物が得意分野です。学生たちは皆意識が高く、そのまま社会に出しても即戦力としてすぐ使えるような人材です。澎湖島は小さい島なので、島の出身の学生が多いかと思ったら、島の出身は2割ほどで、ほとんどは台湾本土から来て

いました。それだけ魅力があるということでしょう。学生交流によって、互いに刺激を受けることができると思います。

金城 今、インターンシップというものが見直しがされていて、短期のものから、2週間、もっと長期的な形で考えていこうとしています。現場の実体経済の企業ニーズと大学のニーズを結び付けるような動きがありますが、当行は、インターンシップの中身をいろいろと趣向をこらして、これまでもバージョンアップをしてきています。今回は、インターンシップのカリキュラムを変えるという試みをしているんです。

まず、経済を切り口に琉球の歴史、そして、戦後の沖縄の発展を学ぶカリキュラム。戦後どのように沖縄が発展し今に至るかを学ぶことで、地元沖縄で働くことの意義を考え、就業意識を向上させるのがねらいです。

二つ目は、アクティブラーニングを取り入れていることです。従来のインプット型の講義形式が大半というものでなく、学生が考える主体となって、

アウトプットするというものです。証券国際部で担当者が資金運用を考えるときに、例えば株式であれば、業種とか業種とか銘柄とか、いろんな会社の株をどういうふうに組み合わせるとリスク分散を図っていくかという「ポートフォリオ」という概念があります。その運用業務の株式ポートフォリオを、学生たちにグループごとに、自分たちで考えて作らせています。

三つ目は、銀行でやっているライフプランセミナー。子どもが生まれ学校に通い、住宅を建て、定年退職して、年金をもらってという過程。人生におけるライフプランの設計を学生にさせてみよう、というものです。ライフプラン営業のケーススタディを実施して、設定した家族に対して、どうアドバイスをするか、ということを考えてもらいます。

四つ目は、営業店に行き、銀行の業務を学ぶだけではなく、実際に銀行が取引している法人取引先に向いて、その社長にヒアリングをするんです。会社の名前の由来や歴史について学生が企業の社長にインタビューします。今回43名のインターンシップを受け入れて、実際に38店舗で行っています。このように、銀行においても、旧来のインターンシップの中身をバージョンアップして、さらに良いも

のにしようと努力しています。

大城 2週間のメニューとしては本当に素晴らしいですね。

インターンシップが始まった約20年前、琉球銀行に学生を預かっていただきました。その頃、私のインターンシップのイメージは、銀行はどのような業務をしているのかということをお店の各部を日替わりで見て、あるいは支店に行き見てということで終わる、というものでしたが、琉銀の人事部では独自のプログラムでやりますと言っておられたのが記憶に残っています。

金城 昔と違って、今は人手不足で売り手市場になっているんです。企業の方は人が欲しい、でも人がいないという状態。銀行でも、処遇を改善するとか対策を考えなければならぬという危機感を持っています。インターンシップは学生に企業を知ってもらえる良い機会になるということで、今後、企業はより積極的にインターンシップを受け入れていくと思います。

大城 インターンシップで実際に業務を経験し、社会体験ができるのは学生にとって大きな意義があります。職業の選択肢を増やす意味でも積極的に活用してほしいですね。

とって、払える見込みがなければ、どんどん借りたりはしませんね。

金城 おっしゃるとおりです。企業も将来が明るくなければ、銀行からお金を借りて設備投資をしようという意欲は持てないんです。それで、子どもが今やろうとしているのは、アントレプレナー支援です。会社を興す、企業を興していく人たち、そういったマインドを持った若い人たちをサポートして応援していこうという試みです。

先日、沖縄市一番街のスタートアップカフェのイベントで、参加者の方の話を聞きましたが、若者が沖縄にどんどん移住しており、さまざまな考えの人たちが増え、面白い場所になっていると言っていました。スタートアップカフェでは、3Dプリンターとか、そういったものを置いて、低料金で使用させています。若者が集まりアイデアが集まる場所になっています。その辺も、総合大学である琉球大学でやってみたら面白いんじゃないかと思えますね。

大城 第3期中期目標期間のキャッチフレーズが「アクティブシンクタンクとしてイノベーターな大学」です。沖縄の子どもたちの発想は面白いと思えますし、大学には多様な人材が集まりますから、こうでもない、ああでもないという議論をしている中から新しい価値が生まれてくるのではないかと考えています。大学発ベンチャーはなかなか成功していませんが、本学には在学中に起業して成功している学生がおります。これからも、彼らに続く学生ベンチャーが増えることを期待しています。

II ガバナンス改革

金城 当行では、観光産業科学部長の下地芳郎先生に、社外取締役としてご参加いただき、取締役会の中でいろいろご意見をいただいています。社外取締役や社外の監査役がいて、ちゃんと銀行に対して外部の視点からご意見を言うていただく必要があります。銀行も含めて、日本の企業は、今、ガバナンスが問われています。

II チャレンジを支援する

金城 今、マイナス金利政策で貸し出しの利回りは低下しています。しかし、今の日本の現状は、金利が低いからといって、簡単には資金需要は起きません。デフレを脱却して、物価がプラス2パーセントぐらい上がるというのは、ほど遠い感覚になっていますね。

大城 若い人たちの所得も低下していますし、右肩上がりではありませんから、金利が低いから



そういう意味では、大学もそうですね。大学改革というのは、まさにガバナンス改革ではないでしょうか。

大城 おっしゃる通りです。今回の企画もそうですが、外部の意見を大学経営に生かそうという趣旨で、できるだけ外部の意見を伺うことが重要だと考えています。

金城 日本全国は、人口がどんどん減少していく。しかも、地方では人口減少が激しい。そういう中で、問われているのは、銀行はどうやって生き残っていくのか。生き残りを賭けたビジネスモデルは、本当にこれまでのビジネスモデルで大丈夫なのかということを問われているんです。

今は経済的に好調ですが、いずれ沖縄も人口が減少するでしょうし、景気には波があります。どのような状況でも慌てないように、しっかりと改革を進めていかなければならない。そういう意味では、危機感をいかに共有するかということが大切です。琉球大学の経営協議会に出て大学の先生と話して感じるのは、人口減少の中で、大学も経営という観点から、さまざまな改善・改革を進めないといけないということです。

大城 そのとおりです。人材を育成することが、大学の大きな機能のひとつで、これからの新しい社会のニーズ、地域のニーズに合わせた人材を育成しないといけないわけですね。そのために、改革が必要ですし、魅力のある組織をつくっていかないと、教員にも

考えてもらっていかないと、研究者の視点ではなく、学生の立場で何が必要か考えることが必要です。大学全体で危機感を共有して改革を進め、地域から信頼され求められる大学となるためにも、ガバナンス改革は必要だと痛感しています。

II 琉球大学への期待

大城 いろいろと興味深いお話を伺ってまいりましたが、そろそろ時間となりましたので、最後に、琉球大学の卒業生として、また経営協議会委員として、本学へ期待することがございま

たらお聞かせください。

金城 やはり沖縄県における琉球大学の存在はとても大きいと思います。8000名の学生と800名の先生方がいて、その影響力も含め、地域社会からの期待も大きい。最近

は、経済界・企業との連携もますます増えており、これから沖縄を変えていけるのではないかと期待しています。

先ほどお話したように、沖縄の位置づけは、日本の西南端からアジアの中心へと変わってきていると思います。日本がやろうとしていることは、沖縄を目指しているのではないかと。つまり、昔、産業構造の問題があって、沖縄には製造業が育たなかった。そして今、日本という国は、全体として製造業が賃金の安い海外に移転して、第3次産業であるサービス業が増えてきています。日本の産業構造が沖縄型に変わりつつあるということです。沖縄が日本の最先端を行っている。そういう中



グローバルな人材を育てていくという役割を担ってほしいですね。

大城 おっしゃるように、沖縄が日本を引っ張っていくという形になればいいと考えています。そのためにも、琉球大学が中心となって、アジア・太平洋地域の大学とのネットワークを強化して、教育研究拠点としての地位を確立しなければいけない。本学の長期ビジョン「地域とともに豊かな未来社会をデザインする大学」と「アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点大学」は、地域社会・国際社会へ貢献する大学としての我々の決意表明でもあります。

金城 アジアから優秀な学生がどんどん沖縄に来て、また彼らが戻って行く。そういう人の交流を含め、物流、そして資本が集まる大きな拠点として沖縄が立地する中で、知の拠点という観点で中心となるのは琉球大学しかないでしょう。

大城 我々もその事を肝に銘じて、期待される役割をしっかりと果たしていこうと思っております。

本日はどうもありがとうございます。

必要なのは、魅力ある組織づくりのためのガバナンス改革ですね。（大城）

で、先ほど日銀短観業況判断DIの話でしたが、全体が+1桁台のときに、沖縄だけ+46とか+39とか、次元が違う景況感の強さを持っています。これをどう捉えるか。これからの時代、日本の方向性を逆に沖縄から発信していかけるのではないかと。ということですね。

このような状況で、琉球大学の置かれた立場とか位置付けも自ずと定まってくるのではないのでしょうか。

これからの時代、海外に進出する沖縄の企業もこれからますます増えてきますし、若い学生たちを海外に送って

※Land Grant University（ランドグラント大学）：アメリカ合衆国の大学のうち、モリル・ランドグラント法（Morrill Land Grant Colleges Act）の適用を受けている大学で、土地付与大学と訳されることもある。大学の有する資源で社会に貢献することを基本的使命とする。

ローカル だけど グローバル

離島発

再生可能エネルギー研究

千住 智信

工学部電気電子工学科 教授



ー 琉球大学で行われている研究を紹介するシリーズで、工学部電気電子工学科の千住 智信 先生の研究室にお邪魔しています。最初に、先生の子供時代について教えてください。

千住 佐賀県佐賀市で生まれ、高校卒業まで過ごしました。1963年の生まれです。子供の頃は、メカものが好きで、アマチュア無線もやっていました。

ー 機械がお好きだったと。それで大学も工学部を選ばれたのでしょうか？また、琉球大学を選ばれた理由はいかがでしょう？

千住 寒いところが苦手なんです。私は、非常に冷え性で、すぐしもやけになってしまうのです。それで4年間くらい暖かいところに行こうと琉球大学を選びました。さらに九州には無い固有の文化や歴史にも心がひかれました。

ー 琉球大学の工学部に入学して、早い段階から電気関係を目指したのでしょうか？

千住 工学部を選んだのは、電気が好きだというのはありました。今思えば、見よう見まねでしたが、中学生の時に風車を自作して風力発電システムを作っていました。修士課程に入って、最初は趣味の延長から電波をやりようと思ったのですが、寮生時代の先輩の影響で上里勝寛先生（現 琉球大学名誉教授）の研究室に入りました。最近は横のつながりが学生間で強いようですが、当時は縦のつながりもありました。上里先生はモータを専門に研究されていて、私も最初はモータの研究を開始しました。その後、モータの周辺技術に注目するようになりました。モータを制御するための電力変換器、モータの位置制御の理論、そこから再生可能エネルギー。

再生可能エネルギーの研究では電力系統の理解が欠かせないので電力工学も勉強しました。電力工学と一口に言っても、色々なことを理解する必要があります。発電機の運用コストを最小で実現するにはどうしたらいいか？とか、送電潮流の最適化のためにはどうしたらいいか？とか、発電機の容量とか建設位置とか、運用に関する分野で研究を継続して今日に至っているという感じですね。

ー 略歴を拝見すると、琉球大で修士号を取得、名古屋大で博士号を取得後、グラスゴー大学で研究員とありますね。

千住 私の在学当時は琉球大学工学部に博士課程がなかったもので、モータの専門家がいた名古屋大学で内地研修員制度を利用して論文博士を取得しました。30代半ばの頃、在外研究員の制度を活用して1年間グラスゴー大学に行き、有名なモータ研究者の下で研究しました。その後、シンガポール国立大学で研究員の経験があります。外国好きということもあるのですが、その当時の留学が今になって外国人留学生の指導に役立っていると感じています。留学生がどう思っているのか、何をしたいのか、留学していなかったらわからなかったと思います。研究室の日本人学生にも、留学生のチュータを担当してもらっています。彼らにも勉強になりますので。

ー 千住先生のところで研究したいという留学生も多いのでしょうか。インターネットで調べてくるのでしょうか？

千住 PRが重要ですので、HPで研究内容を公開しています。当然、自分の研究室でも英語版のページも公開しています。私の研究室のHPもリニューアルしてさらに充実させる予定です。留学生は研究室の研究成果も注目して見えています。

ー 今は獲得した外部資金の情報も、インターネット上でオープンになっていますね。千住先生がこれまで獲得した科研費のタイトルも、データベースで出ています。最初は、ファジィ制御を用いた風力発電の制御に関する研究だった様ですね。

千住 ファジィは「あいまいな」のファジィです。極端に言う、基本的にモータと発電機は物理的に同じものですから、モータでの研究成果を発電機の研究に活かしました。何も無いところから研究を組み立てるのは大変なことから、知見を活かせるような研究ということでテーマを選定してきました。

ー 研究は、1994年にスタートしています。今のように、再生可能エネルギーや自然エネルギーがメジャーになる前ですね。こうした研究に興味を持ったきっかけは何だったのでしょうか？

千住 一つは、県内企業との産学連携による共同研究です。当時は他の研究者に笑われることもあり、「原子力があるのに風力が何の役に立つんだ？」って。では何故それが日の目を見たかということ、例えば現学長は鳩間島の出身ですが、沖縄県内の小規模な離島に原子力発電所を作れますかという事です。当然、それは無理ですから、再生可能なエネルギーが必要になると考えました。本土の大学にいたら、考えつかなかったでしょうね。再生可能エネルギーの研究を早くから始められたのは、琉球大学の地域性もあると思います。地域に根ざした研究も、当時の研究の動向を取り入れて取り組みました。ファジィも、当時は大きく注目されました。取り組んでいない研究者には、当時批判もされました。ファジィで全てのが解決するわけではないですが、継続して研究すれば、その利点欠点も見えてきます。

ー 学生の教育面については、いかがでしょうか？工学分野では、地域性よりも普遍性を重要視する研究者も多いと思いますが。

千住 今の流行りで言うと、グローバルです。ローカルだけどグローバル。私の研究室にはJICAの事業で外国からの留学生も多数来ていますが、「離島における再生可能エネルギーの研究」への関心は高いです。再生可能エネルギーと一口に言っても、地域によって関心の持ち方が違うのがおもしろいところです。先に述べた県内企業との共同研究では、学生に成果報告会の担当や研究に関する議論をさせ、やる気を出してもらうように仕向けています。英語に関しては、最初は教科書的な技術英語の基礎を勉強してもらい、それから研究に役立つような論文を講読ができて、論文執筆も行わせ、最後に日本語を読むように英訳ができるように指導しています。つい最近、自動車メーカーに勤務する教え子が大学の研究室を訪問してくれましたが、最先端の自動車技術に関しては外

国での仕事が半分以上になる部署もあり、そこでは英語が日本語のように使えないと役に立たないそうです。これがグローバル人材の実情ですが、大学生にとっては英語の勉強は最初きついかも知れません。そこで、教員が指導しないと学生の立場ではわからないこともあると思います、効率的に英語を修得できる勉強方法をしっかりと指導しているところです。

ー 最後に、これから琉球大学に入ってくる学生へのメッセージをお願いします。

千住 やる気がある学生であれば大丈夫ですよ。最近では少子化が進んで受験偏差値も下降していますが、若いときは単に受験偏差値だけでは能力的なものは測れません。私の研究室の学生だって、最初からずば抜けて優れているわけではないのですから。継続して勉強して適切な指導を受けたら、先輩からの引き継ぎもありますが、学部学生が英語で論文を書いて評価されるという事も達成できます。研究室には留学生もいますし、日本人学生は積極的に国際会議にも参加し、日常的に英語を使っています。そういう環境を経験したいやる気ある外国人留学生や日本人学生が琉球大学へ多数進学される事をお待ちしております。

●千住智信（せんじゅ ともひさ）

1988年 琉球大学大学院工学研究科修了

1994年 博士（工学）、名古屋大学

専門分野 パワーエレクトロニクス／電力系統工学／最適化学／制御工学／再生可能エネルギー



←工業部キャンパス
近くに設置された街
灯。太陽電池と風力
発電機を利用した
「ハイブリッド型発
電機」を搭載してい
る。風車から得られ
る発電電力を最大化
するための技術、太
陽電池の最大電力追
従技術など、千住教
授の研究成果が盛り
込まれている。

インタビュアー：

殿岡裕樹（とのおか ゆうき）

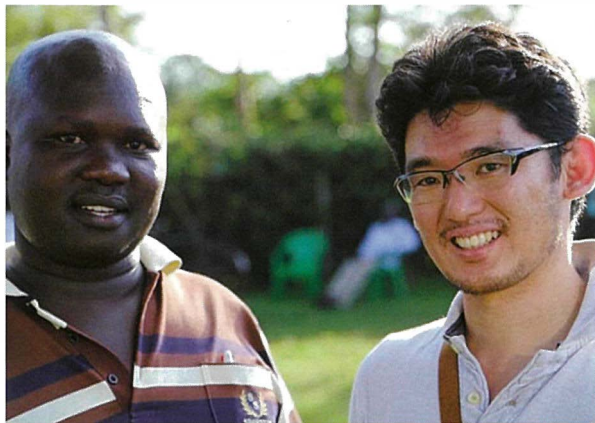
研究企画室上席URA

6年続けてのケニアでのボランティア皮膚科診療

皮膚科の大学院生の内海大介と申します。ケニアの農村での皮膚科診療活動についてご紹介します。中央アフリカに位置するケニアは、世界的に見てもHIV感染率の高い国で、活動拠点としているケニアの貧村のニャンザ州Gem East村では、感染率が15.1%と依然高い地域です。私は、2011年からケニアでのHIV/AIDS診療支援を目的とするアサンテ名古屋というNPO団体に帯同し、毎年2週間ほどの日程でケニアの同地を訪問してきました。主な目的は、HIV/AIDS診療の専門医とともに、参加唯一の皮膚科医として診療を行い、彼らの活動をサポートすることです。

皮膚疾患を合併しているAIDS患者は勿論のこと、外傷、熱傷、感染症などの一般的な皮膚疾患を持つ多くの非AIDS患者を診察してきました。Gem East村は上下水道、電気、ガスなどのインフラが全くない村であり、当然、医療機器もないような現場では、はなから日本と同じレベルの検査や治療を行うことは不可能です。このような状況では、自分の知識や手技の不十分さが如実に現れることを痛感します。日本国内での診療活動が如何に、検査機器、文献、ネット情報に依存

していたかを思い知らされます。一方で、多くの制限がある中でも、皮膚科医の『目』と『手』を活かした診療を行うことで、皮膚科医としての存在意義を強く再確認することができました。本年も参加するアフリカ・ケニアでのボランティア皮膚科診療活動での貴重な経験は、大学での診療・研究の糧になると強く感じています。



障がい学生支援室開所式について

本学では、昨年6月1日に障がい学生支援室を設置し、これまで、関係規程等の整備や学内関係部署との連携強化を図ってきましたが、本年7月1日、本学大学会館2階に事務室を整備するとともに、新たに専任教員1名及び専任職員2名を配置し、本格的に稼働することになりました。

今回の障がい学生支援室の本格稼働に当たって、平成28年8月1日(月)、本学の古城肇学長及び、渡名喜庸安障がい学生支援室長(理事・副学長)をはじめ学内外の関係者総勢40名余が参加し、開所式を挙りました。



夏休み自由研究イベント開催

平成28年8月14日(日)、沖縄県立博物館・美術館にて、本学医学部で感染症研究に携わる研究者が企画した夏休み自由研究イベント「蚊・ネズミによってかかる世界の病気を知ろう」を開催しました。

このイベントは沖縄県の委託事業「沖縄感染症拠点形成促進事業(動物媒介性感染症対策の沖縄での施策提言とネットワーク形成に関する研究)」を受け、亜熱帯に位置する沖縄で特にリスクの高い動物媒介性の感染症について、子どもたちに分かりやすく伝えるために開催したものです。

研究リーダーの保健学科 小林潤教授と児玉光也特命助教による展示では、国際協力機構(JICA)沖縄事務所、青年海外協力協会(JOCA)沖縄事務所の協力を得て、アジア・アフリカ地域からの研修生と子どもたちとの交流「世界の人たちと病気を防ごう」が行われました。



学生援護会平成28年 熊本地震奨学金授与式

本年4月に発生した熊本地震により学費負担者が被災するなど、今後の修学及び生活が経済的理由により困難となった学生に対して、琉球大学学生援護会より奨学金を給付する事となり、平成28年10月12日(水)、授与式を執り行いました。



「九州・沖縄アイランド女性研究者支援 シンポジウムin沖縄」開催

平成28年11月11日(金)、本学大学会館において「九州・沖縄の国際化と女性研究者の役割」をテーマに、九州・沖縄アイランド女性研究者支援シンポジウムin沖縄(共同主催：本学、沖縄科学技術大学院大学)が開催され、120名を超える多くの参加者が学内外より参加しました。本事業は九州・沖縄地区の12大学で組織されたネットワークによって、平成21年度から毎年開催されています。

久米島町・宮古島市・大宜味村・国頭村と国立大学法人琉球大学及び 公立大学法人名桜大学による地域における雇用創出・若者定着に係る協定締結

平成28年10月28日の久米島町を皮切りに11月2日にかけて、久米島町(10月28日)、宮古島市(10月31日)、大宜味村(11月2日)、国頭村(11月2日)において、各市町村と国立大学法人琉球大学及び公立大学法人名桜大学による地域における雇用創出・若者定着に係る協定締結式が関係者による出席の下、執り行われました。

本連携協定は、平成27年度文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択された琉球大学と及び名桜大学のプログラム「新たな地域社会を創造する『未来叶い(ミライカナイ)』プロジェクト」事業(以下「COC+事業」という)及び各地方公共団体が策定する「ひと・まち・しごと総合戦略」の推進のため、

各市町村における雇用創出・若者定着に関する目標を定め、その達成を図ることを目的として締結するものです。

各式典では始めに、大学側から本協定締結及びCOC+事業の趣旨を説明し、その後、協定内容の確認が行われ、各機関の代表である、首長と大城肇琉球大学長及び山里勝己名桜大学長が協定書に署名し、協定が締結されました。

これまで、本事業において、両大学は沖縄県及び石垣市と協定を締結しておりましたが、久米島町、宮古島市、大宜味村、国頭村が加わり、1県、5市町村と連携協定を締結したこととなります。



【久米島町】



【宮古島市】



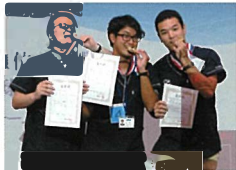
【大宜味村】



【国頭村】

シムリンピックで全国優勝

全国の医学部学生が臨床実習での学習の成果を競うシムリンピックにおいて、琉球大学学生チームが全国優勝を飾りました。琉球大チーム「やっけーいきがーs(沖縄の方言で「やっかいな男たち」の意味)」のメンバーは、いずれも医学科5年生の能美康彦さん、金城英樹さん、仲間海人さんの3人。全8種目のうち「腹部診療」「腎・泌尿器診療」「救急患者対応」の3種目で1位に輝きました。本学は昨年度も準優勝しており、それをきっかけに3人は出場を決意。受賞にあたり3人は、「今回は地域の病院などを含む多くの先生や先輩方にお世話になりました。当直後に指導にあたってくれた先生もいっしょり、感謝しています。」と述べ、引率した又吉哲太郎助教は、「琉大は学生と先生の距離が近く、十分に練習出来たことも勝因の1つではないかと思う。今後もこれを励みに、目標に向けて自主的に取り組む姿勢や意欲を持ち続けて欲しい」と述べています。



(左から)能美康彦さん、金城英樹さん、仲間海人さん

世界のウチナンチュ大会に出展

琉球大学は平成28年10月27日(木)~30日(日)に開催された「世界のウチナンチュ大会(沖縄セルラーパーク那覇)」に出展し、沖縄関連分野における研究や、本学と企業等による共同研究・開発商品などの展示を行いました。

同催しは沖縄にルーツをもつ海外の日系人を招待して開催され、世界中から集まったウチナンチュらが、本学の展示ブースを訪れ、本学の研究に親しみました。



子ども達に大人気な
タジック・アース



ロボット三線から流れる
音色に足を止める人々



自分の顔のスキャン映像を
見る子供達

ゼロマラリア賞を受賞

平成28年5月31日(火)、琉球大医学部 小林潤教授が第三回ゼロマラリア賞を受賞し、本学学長室で受賞式が行われました。同賞は、アメリカに本部を置き、マラリア撲滅を目的に国際的な取組を実施している団体「Malaria No More(マリア・ノ・モア)」より授与されたもので、マラリア制圧のために取り組む個人や団体を表彰するものです。



(写真左:小林潤教授)

琉球大学岸本基金 (Endowment) 創設

平成28年4月15日(金)、本学と岸本ファミリー個人慈善基金との間において琉球大学岸本基金(Endowment)の設立に係る調印式が執り行われました。今回設立された「琉球大学岸本基金」は、地球環境保全に向けた教育・研究活動やグローバル人材養成などを目的としたもので、2029年まで毎年20~50万ドルを基金元金に積み増しし、最終的には583万ドル(約7億円)の基金となる予定です。この琉球大学岸本基金は、同窓生個人が創設されたことに加え、基金が米国で管理・運用され、その運用益が本学への寄附金として入ってくるシステムとなっており、国内でも非常に例の少ない大変ユニークな仕組みになっています。



新たな乳酸菌飲料「美らBio」を開発

平成28年9月12日(月)、沖縄県庁において産学官連携による開発で誕生した新たな乳酸菌飲料「美らBio(チュルピオ)」の記者会見が行われました。「美らBio」は沖縄県の戦略的製品開発支援事業ほか各種支援事業を活用し4年間かけて製品化に成功したもので、もろみ酢原液を乳酸菌発酵させることによりアミノ酸量は維持しつつ独特のもろみ酢臭を軽減し、黒麹菌・乳酸菌・酵母菌の3つの力が作用する新しい乳酸菌飲料です。



沖縄海洋ロボットコンペティション

海洋資源分野の研究・教育等の活性化の一つとして「第2回沖縄海洋ロボットコンテスト」が開催されました。同催しは、高等教育機関や企業等の研究開発成果を発表する場となるとともに、沖縄県民や児童生徒・学生の沖縄の海洋資源関連作業や海洋ロボットの可能性について理解を深める場となりました。



大学生が大学生約1,000人へ講演

琉球大学の学生であり、学生起業「株式会社がちゆん」の社長でもある国仲瞬さんが、同じ大学生である千葉商科大学学生約1,000人へ講演を行いました。国仲さんは琉球大学教育学部に在籍する大学4年生です。3年次の時に学生起業「株式会社がちゆん」を立ち上げ、修学旅行で沖縄に来る生徒に向けた平和学習プログラムの提供をはじめ、問題解決型企業訪問プログラム、主催者教育授業開発などの様々な学習プログラムの開発・提供、などを行っています。



琉球大学 プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー

2015年度のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの表彰式が開催され、大城学長から受賞者に表彰状が贈られました。優れた教育実践を行っている教員を表彰するプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーは「学生による授業評価アンケート」の総合評価を用いて選出されます。共通教育等科目の10の科目群からそれぞれ1名の受賞となり、年間1,000を超える共通教育等科目から約1%程度しか受賞できないハードルの高い賞です。



琉球大学と米国・東西センター、 リエゾンオフィス覚書を締結

平成28年10月17日(月)、琉球大学と東西センター(米国ハワイ州)とのリエゾンオフィス相互設置に関する覚書の調印式が執り行われました。本覚書の締結により、本学にとって米国における初の海外拠点の設置となりました。本学と東西センターとは、これまで様々な分野において学術交流を推進しており、特に小渕国際交流基金フェローシップや小渕東西センター奨学金制度により、多くの本学教員、大学院生、卒業生が東西センターにおいて研究や勉学に取り組んできました。



地震被害調査報告会 「熊本地震－沖縄県への教訓」

平成28年5月2日(月)、琉球大学島嶼防災研究センターによる熊本地震の被害調査報告が実施されました。琉球大学島嶼防災研究センターは、これまで地震や津波、台風、地すべり、洪水等の災害に対し、予防法や災害時の自助・相互扶助・公的支援といった人間行動分野、また災害が発生した後のサポート研究に取り組んできました。今回は4月に発生した熊本地震による被害状況とその特徴を調査するため、4月22日から24日の3日間、被害調査団を派遣し、その調査結果の報告がありました。



台北サテライトオフィス開設

平成28年5月13日(金)、台北市中山区にある沖縄県産業振興公社台北事務所において、「琉球大学台北サテライトオフィス」の開所式を執り行いました。本オフィスは本学初の海外拠点であり、開所式には本学から大城肇学長、小島浩孝理事、新垣雄光国際教育センター長、大浜善秀総合企画戦略部長及び金城徹国際連携推進課長が出席し、沖縄県台北事務所より吉永亮太事務所長、ご来賓として黄輝慶逢甲大学教授及び、陳韋廷台湾同窓会代表が出席されました。



留学生たちによる演劇

「竹取物語」上演

留学生たちが日本の文化に触れ、理解を深めるため、共通教育日本語・日本事情科目、日本語Ⅲ(1組)による日本語劇「竹取物語」が上演されました。主役であるかぐや姫を台湾出身の男子留学生が務めたり、歌や踊りを織り込んだりするなど観客を楽しませました。笑いを誘うシーンでは、会場は大きな笑いに包まれておりましたが、別れのシーンでは、涙をさそうほどの名演技でした。



学生と教員による

癒やしのコンサート

平成28年11月16日(水)、19時～20時、医学部附属病院2階外来ホールで琉球大学教育学部学生(学校教育教員養成課程 音楽教育専修)と教員によるコンサートが開催されました。当日は出来るだけ様々な楽器や曲調に親しんでもらおうと、リコーダーやバイオリンなどの様々な楽器で、民謡から本格クラシックまで幅広いジャンルの曲を披露し、観客を魅了しました。



理学部生物系と中國文化大學理學院 生命科学系の国際合同実習

平成28年8月28日から9月2日の6日間、琉球大学千原キャンパスにおいて、理学部海洋自然科学科生物系と台湾台北の中國文化大學理學院生命科学系(CCU)の学部生を対象とした国際合同実習を行いました。



サイエンス・カフェが開催

平成28年6月29日(水)、本学附属図書館において、研究企画室(URA室)と附属図書館のコラボ企画として、第1回サイエンスカフェが開催されました。サイエンスカフェとは、90年代後半にイギリスで生まれ、科学者と市民の双方が科学を学ぶことのおもしろさやその社会的な重要性などを、一方的な講演スタイルではなく、リラックスした空間で対話することで、自分自身の思考を解きほぐし、科学や社会、そして持続可能な未来のあり方について考え、新たな実践を生むことを目指すものです。



タイ・ラオスのお正月

「ソクラーン・ピーマイラーオ」開催

平成28年5月14日(土)、本学国際交流会館にて「ソクラーン・ピーマイラーオ」(水かけ祭り)を開催しました。ソクラーンとは、タイ・ラオスで新年という意味であり、仏像や家族、特に年長者へのお清めや、健康を願って行う伝統的なお正月のお祭りです。午前中に家族で集まり、仏像のお清めを行い、年少者が年長者にお祝いしながら手に少量の水をかけることで敬意を表します。現在では、それが転じて「水かけ祭り」として、世界中に知られています。また、お清めの後にはこれから良いことが起こると信じられています。



学長室でオオゴマダラが羽化

平成28年6月5日(日)、「首里城下にチョウを飛ばそう会(大城安広会長)」主催、琉球大学の共催によりオオゴマダラの幼虫の食草と成虫の蜜源となる植物を植栽するイベントが開催されました。「飛ばそう会」から大城学長に寄贈されたオオゴマダラの蛹は、学長室で次々と羽化し、窓から大空へ飛び立って行きました。



ロッキーチャレンジ賞受賞式と 基調講演 (21世紀フォーラム)

平成28年8月9日(火)、本学大学会館において、ロッキーチャレンジ賞受賞式と受賞者による基調講演を開催しました。ロッキーチャレンジ賞(那覇市出身。日産ディーゼル工業元社長、仲村巖氏が設立)は、教育、学問、経済、実業、起業、創業等の様々な分野で、沖縄の若い人たちの夢や目標となり、志やチャレンジ精神において優れた志向と行動を併せ持っている個人や団体に贈られます。

今回は第7回目で、那覇市出身の国立天文台ハワイ観測所すばるアウトリーチスペシャリストである嘉数悠子さん(写真中央)が受賞しました。



(左から)仲松健雄氏、嘉数悠子さん、仲村巖氏

鏡が丘特別支援学校中学部の 生徒さんが本学極低温施設を見学

平成28年10月14日(金)、沖縄県立鏡が丘特別支援学校中学部の生徒さん9名と引率の先生方6名が職場体験の一環として、本学研究基盤センター極低温施設を見学に訪れました。同施設の宗本技術専門職員から、大学の研究等で使用する「液体窒素」と「液体ヘリウム」について、ユニークなクイズ形式や実験を通じた説明が行われ、瞬間的に凍るバラの花や風船を使った気体の収縮や膨張など、マイナス196℃の世界を興味深く体感しました。



短期交換留学プログラム修了式

平成28年8月19日(金)、本学大学会館において「短期交換留学プログラム(URSEP・STRP)」の修了式が挙行されました。「短期交換留学プログラム」とは、琉球大学の学生交流協定締結校から派遣された交換留学生在本学で日本語や日本・沖縄文化、各専門分野などを学ぶプログラムです。



平成28年度留学協定締結校修了式

デジタルによる 地域経済の活性化

平成28年10月の後学期開始から、本学とグーグル(株)、(株)沖縄銀行、(株)サイバーエージェント、(株)シーエー・アドバンスの4社による「地域創生のためのデジタルマーケティング入門」が開講され、約100名の学生が受講しました。平成27年度より、琉球大学は文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」の補助事業である「新たな地域社会を創造する『未来叶い(ミライカナイ)プロジェクト』」に採択されており、大学と事業協働機関が連携し、地域が抱える課題と大学の資源のマッチングによる新産業・雇用の創出と、地域が求める人材育成、若年層の地元定着のための取り組みの推進やカリキュラムの開発・実施などに取り組んでいます。

農学部与那フィールドの森が 「やんばる国立公園」に指定

与那フィールドの森の大部分が、平成28年9月15日に誕生した「やんばる国立公園」の公園区域に指定されました。その中には、保護レベルの高い「特別保護地区」や「第1種特別地域」も含まれています。このことは、与那フィールドの森が、やんばる地域の亜熱帯林における生態系や生物多様性の維持にきわめて重要な役割を果たしていることを示しています。また、やんばる地域は、将来的に世界自然遺産への登録も視野に入れていきます。



与那フィールドの森



ヤンバルクイナ



オホクワシロカマゴシ

第5回元山和仁記念 社長弟子入りツアー

本ツアーは、県外就職を希望する沖縄県内の大学3年生、短大1年生等を対象にしており、東京中小企業家同友会が学生の往復旅費と宿泊費を負担し、学生が1週間の期間で同会の会員企業の2社において就業体験を行い、今後の就職活動の糧とすることを目的に実施しています。具体的には、企業経営ポリシーや経営者の行動・発言に触れるとともに、社員へのインタビュー、社内会議への出席、営業活動への同行、模擬入社試験など、ビジネスの最前線を肌で体験することとしています。



第5回 元山和仁記念
社長弟子入りツアー実施報告

学生たちの支援や大学の活動のための 琉球大学基金



第16代学長 大城 肇

琉球大学では、学生支援・教育研究活動を強化し、地域社会・国際社会へ還元していく事を目的に「琉球大学基金」を創設しました。本基金の趣旨にご賛同いただき、格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附金の主な用途

- ① 経済的に修学が困難な学生への支援・給付型奨学金
- ② 学生の課外活動及び就職等への支援
- ③ 研究活動への支援
- ④ 社会との連携事業への支援
- ⑤ 国際交流事業への支援

本学では、経済的に修学が困難な学生（家計200万円未満の学生）に対する授業料免除などの支援を行っておりますが、十分には行き渡っておりません。



税制上の優遇措置

個人からのご寄附は、「寄附金控除」の対象となり、税制上の優遇措置を受けることができます。なお、上記①の経済的に修学が困難な学生へのご寄附については、平成28年度の税制改正により、これまでの「所得控除」に加えて「税額控除」も適用になれます。確定申告の際に、寄附者ご自身でどちらか有利な方をご選択いただけます。

法人からのご寄附につきましては、「全額損金算入」が適用になれます。

寄附をご希望の方は、お手数ですが本基金HPをご覧ください。
URL : <http://www.kikin.jim.u-ryukyu.ac.jp>

【お問い合わせ先】 琉球大学基金室
〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

E-mail : kikin@to.jim.u-ryukyu.ac.jp
TEL:098-895-9013
FAX:098-895-8013

広報室からの お知らせ

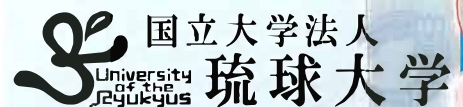


- ① 平成29年7月～8月の2ヶ月間、文部科学省エントランスにおいて「琉球列島における生物多様性～知る・学ぶ・守る～」をテーマに研究展示を行います。大型パネルを使用したパネル展示・ドローン空撮による動画展示・イリオモテヤマネコなど希少動物の剥製展示など、多彩な展示を計画中です。
- ② 平成29年7月下旬の2日間「霞ヶ関子ども見学デー」が開催され、本学も昆虫をテーマとした展示を行います。顕微鏡での昆虫観察やワークシートを使った琉大クイズなど、楽しく学べる企画です。子ども達には琉大オリジナル文房具のお土産を多数準備しています。夏休み中の企画ですので是非親子でご参加ください。

※申込みは文部科学省HPよりお申し込みください。

News Letter Vol. 21

2017年4月発行
琉球大学広報室



〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町字千原1番地
TEL : 098-895-8175
kohokoho@to.jim.u-ryukyu.ac.jp
<http://www.u-ryukyu.ac.jp/>